

たんの小史

## ふるさと端野

⑦

### 先達の方々

#### 駅通と取扱人(その1)

駅通とは、旅行者や入植地への交通の便を図る交通制度の一つの形態で、旅をする人たちの宿泊をまかなうのが主な業務でした。また、人や物等を次の駅通まで馬で運んだり、郵便物の通送をしたりしました。

このため、駅舎は宿泊できるように建てられ、駅舎に接し厩舎(馬小屋)が設けられていました。

この駅通制度は古くからあり、律令時代(六四六)から平安時代(一二世紀)にかけて栄えたといわれています。

北海道においては、蝦夷地と呼ばれていた時代から、蝦夷地の統治(治める)やロシアの南下政策に対応した防備を兼ねた交通運輸機関として設置されました。北見地方にあつては、明治五(一八七一)年、網走の場所請負人藤野番屋から独立し駅場とした「網走駅通」が最初の駅通でした。

明治二四(一八九二)年、中央道路(網走から上川間)が完成し、翌二五(一八九三)年三月、網走から上川までの間に越歳(網走)、端野(端野)、相ノ内(北見)、留辺蘂(留辺蘂)、佐呂間(留辺蘂)、野上(生田原)、中越(上川)に、同二六(一八九四)年六月に、滝ノ下(丸瀬布)、滝ノ上(白滝)に駅通を北海道庁によって設置されました。その後、同三三(一九〇一)年に端野、相ノ内間に「野付牛駅通」、滝ノ上、中越間に「北見峠駅通」が新設されました。

端野に設置された駅通は、現在の国道三九号東一七号線沿い(二区 日下敏雄宅付近)で、駅通の名称はヌツケシコタン(忠志 村中重義宅付近)に近かったので、コタン(アイヌ語で集落の意)名のヌツケシ(野の端)を日本語訳にし「端野」としました。

この「端野」は、大正一〇(一九二一)年、野付牛町から分村した時に「村名」にしました。また、ヌツケウシを日本語にすると「野付牛」で、この野付牛は北見市となる以前の町名です。

この駅通には、北海道庁が任命した「駅取扱人」を配置し、初代の取扱人には、当時、美幌で雑貨商を営んでいた生田錫三郎(元根室県の一等巡査)が任命されました。

この駅通時代についての記録がなく、どのような業務をし、地域とのかかわり等については不明です。しかし、わずかに家族の思い出による記録があり、次女のハルさんが、

「鮭等魚類は、アイヌの人が米、味噌と交換して貰いに持ってきたので、豊富であった」「私が五歳位(明治三二(一八九九)年)の時、乗馬した将校が泊まったことをおぼえている」

と、語り、長男義智の子徹夫氏は、

「自分達が幼かった頃、よく囚人が逃げてきた。大体緋牛内の峠を越えて来たが、或時父が不在で、母と幼い子供達だけの時、囚人が逃げ込んで来た。母は幼児と一緒に台所の下にあるムロに隠れた。囚人は米や味噌を持って逃げ去った」

と、語っています。

明治三六(一九〇六)年八月、生田氏は事情があり、駅取扱人を他に譲ることになり、明治一九(一八八六)年、根室の東和田屯田兵村に屯田戸主として入地し、兵役解除後、野付牛に移住してきた斉藤嘉藤治氏が譲り受けました。

田中 誠

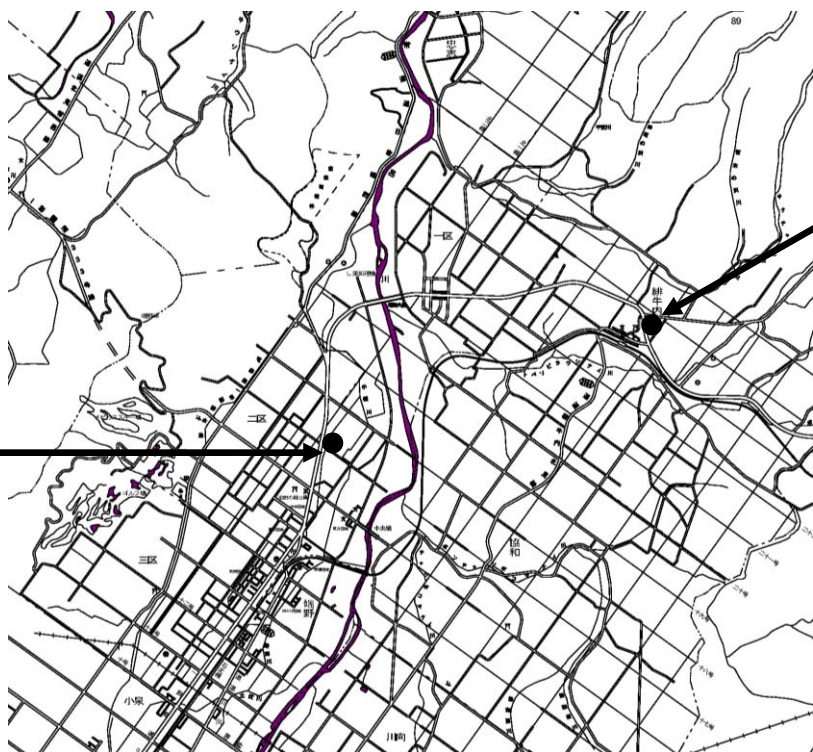
(裏面に続きます)

二号（1次）  
端野駅通跡



二号（2次）緋牛内駅通跡

端野町の駅通は中央道路開削翌年、明治 25 年（1925）二区に設置された。その後美幌端野間の道路が開通したことにより、明治 38 年（1905）中央道路との合流点である現在地に移転した。当時の駅通取扱い人は斎藤嘉藤次であり、大正 11 年（1922）駅通としての役目を終えた。石碑の位置は当時の駅通の井戸の近辺にあたり、石碑のある高さが、当時の道路の高さでもあった。



二号（1次）  
端野駅通

二号（2次）  
緋牛内駅通跡